

## 山 男 の 四 月

山男〔やまをとこ〕は、金〔きん〕いろの眼〔め〕を皿〔さら〕のやうにし、せなかをかがめて、にしね山〔やま〕のひのき林〔ばやし〕のなかを、兎〔うさぎ〕をねらつてゐるいてゐました。

ところが、兎〔うさぎ〕はとれないで、山鳥〔やまどり〕がとれたのです。

それは山鳥〔やまどり〕が、びつくりして飛〔と〕びあがるとこへ、山男〔やまをとこ〕が両手〔りやうて〕をちぢめて、鉄砲〔てつぱう〕だまのやうにからだを投〔な〕げつけたものですから、山鳥〔やまどり〕ははんぶん潰〔つぶ〕れてしまひました。

山男〔やまをとこ〕は顔〔かほ〕をまつ赤〔か〕にし、大〔おほ〕きな口〔くち〕をにやにやまげてよろこんで、そのぐつたり首〔くび〕を垂〔た〕れた山鳥〔やまどり〕を、ぶらぶら振〔ふ〕りまはしながら森〔もり〕から出〔で〕てきました。

そして日〔ひ〕あたりのいゝ南向〔みなみむ〕きのかれ芝〔しば〕の上〔うへ〕に、いきなり獲物〔えもの〕を投〔な〕げだして、ばさばさの赤〔あか〕い髪毛〔かみけ〕を指

〔ゆび〕でかきまはしながら、肩〔かた〕を円〔まる〕くしてごろりと寝〔ね〕ころびました。

どこかで小鳥〔ことり〕もチツチツと啼〔な〕き、かれ草〔くさ〕のところどころにやさしく咲〔さ〕いたむらさきいろのかたくりの花〔はな〕もゆれました。

山男〔やまをとこ〕は仰向〔あふむ〕けになつて、碧〔あを〕いああをい空〔そら〕をながめました。お日〔ひ〕さまは赤〔あか〕と黄金〔きん〕でぷちぷちのやまなしのやう、かれくさのいゝにほひがそこらを流〔なが〕れ、すぐうしろの山脈〔さんみやく〕では、雪〔ゆき〕がこんこんと白〔しろ〕い後光〔ごくわう〕をだしてゐるのでした。

（飴〔あめ〕といふものはうまいものだ。天道〔てんと〕は飴〔あめ〕をうんどこさえてゐるが、なかなかおれにはくれない。）

山男〔やまをとこ〕がこんなことをぼんやり考〔かんが〕へてゐますと、その澄〔す〕み切〔き〕つた碧〔あを〕いそらをふわふわうるんだ雲〔くも〕が、あてもなく東〔ひがし〕の方〔ほう〕へ飛〔と〕んで行〔い〕きました。そこで山男〔やまをとこ〕は、のどの遠〔とほ〕くの方〔ほう〕を、ごろごろならしながら、また考〔かんが〕へました。

（ぜんたい雲〔くも〕といふものは、風〔かぜ〕のぐあひで、行〔い〕つたり来〔き〕た

りほかつと無 [な] くなつてみたり、俄 [には] かにまたでてきたりするもんだ。そこで雲助 [くもすけ] とかういふのだ。)

そのとき山男 [やまをところ] は、なんだかむやみに足 [あし] とあたまが軽 [かる] くなつて、逆 [さか] さまに空気 [くうき] のなかにうかぶやうな、へんな気 [き] もちになりました。もう山男 [やまをところ] こそ雲助 [くもすけ] のやうに、風 [かぜ] にながされるのか、ひとりでに飛 [と] ぶのか、どこといふあてもなく、ふらふらあるいてみたのです。

(ところがここは七 [なな] つ森 [もり] だ。ちやんと七 [なな] つつ、森 [もり] がある。松 [まつ] のいつぱい生 [は] えてるのもある、坊主 [ぼうず] で黄 [き] いろなものもある。そしてここまで来 [き] てみると、おれはまもなく町 [まち] へ行 [い] く。町 [まち] へはいつて行くとすれば、化 [ば] けないとなぐり殺 [ころ] される。)

山男 [やまをところ] はひとりでこんなことを言 [い] ひながら、どうやら一人 [ひとり] まへの木樵 [きこり] のかたちに化 [ば] けました。そしたらもうすぐ、そこが町 [まち] の入口 [いりくち] だつたのです。山男 [やまをところ] は、まだどうも頭 [あたま] があんまり軽 [かる] くて、からだのつりあひがよくないとおもひながら、のそのそ町 [まち]

にはいりました。

入口 [いりぐち] にはいつもの魚屋 [さかなや] があつて、塩鮭 [しほざけ] のきたない俵 [たわら] だの、くしゃくしゃになつた鱒 [いわし] のつらだのが台 [だい] にのり、軒 [のき] には赤 [あか] ぐろいゆで章魚 [だこ] が、五 [いつ] つつるしてありました。その章魚 [たこ] を、もうつくづくと山男 [やまをとこ] はながめたのです。

(あのいぼのある赤 [あか] い脚 [あし] のまがりぐあひは、ほんたうにりつばだ。郡役所 [ぐんやくしよ] の技手 [ぎて] の、乗馬 [じやうば] ずぼんをはいた足 [あし] よりまだりつばだ。かういふものが、海 [うみ] の底 [そこ] の青 [あを] いくらいところを、大 [おほ] きく眼 [め] をあいてはつてゐるのはじつさいえらい。)

山男 [やまをとこ] はおもはず指 [ゆび] をくわいて立 [た] ちました。するとちやうどそこを、大 [おほ] きな荷物 [にもつ] をしよつた、汚 [きた] ない浅黄服 [あさぎふく] の支那人 [しなじん] が、きよろきよろあたりを見 [み] まはしながら、通 [とほ] りかゝつて、いきなり山男 [やまをとこ] の肩 [かた] をたゝいて言 [い] ひました。

「あなた、支那 [しな] 反物 [たんもの] よろしいか。六神丸 [ろくしんぐわん] たいさんやすい。」

山男 [やまをとこ] はびつくりしてふりむいて、

「よろしい。」とどなりましたが、あんまりじぶんの声 [こゑ] がたかゝつたために、円 [まる] い鉤 [かき] をもち、髪 [かみ] をわけ下駄 [げた] をはいた魚屋 [かなや] の主人 [しゆじん] や、けらを着 [き] た村 [むら] の人 [ひと] たちが、みんなこつちを見 [み] てゐるのに気 [き] がついて、すつかりあわてゝ急 [いそ] いで手 [て] をふりながら、小声 [こごゑ] で言 [い] ひ直 [なほ] しました。

「いや、さうだない。買 [か] ふ、買 [か] ふ。」

すると支那人 [しなじん] は

「買 [か] はない、それ構 [かま] はない、ちよつと見 [み] るだけよろしい。」

と言 [い] ひながら、背中 [せなか] の荷物 [にもつ] をみちのまんなかにおろしました。山男やまをとこはどうもその支那人 [しなじん] のぐちやぐちやした赤 [あか] い眼 [め] が、とかげのやうでへんに怖 [こわ] くてしかたありませんでした。

そのうちに支那人 [しなじん] は、手 [て] ばやく荷物 [にもつ] へかけた黄 [き] いろの真田紐 [さなだひも] をといてふろしきをひらき、行李 [かうり] の蓋 [ふた] をとつて反 [たん] 物 [もの] のいちばん上 [うへ] にたくさんならんだ紙箱 [かみばこ] の

間 [あひだ] から、小 [ちひ] さな赤 [あか] い薬瓶 [くすりびん] のやうなものをつかみだしました。

(おやおや、あの手 [て] の指 [ゆび] はずるぶん細 [ほそ] いぞ。瓜 [つめ] もあんまり尖 [とが] つてゐるしいよいよこわい。) 山男 [やまをところ] はそつとかうおもひました。

支那人 [しなじん] はそのうちに、まるで小指 [こゆび] ぐらゐあるガラスのコツプを二 [ふた] つ出 [だ] して、ひとつを山男 [やまをところ] に渡 [わた] しました。

「あなた、この薬 [くすり] のむよろしい。毒 [どく] ない。決 [けつ] して毒 [どく] ない。のむよろしい。わたしさきのむ。心配 [しんぱい] ない。わたしビールのむ、お茶 [ちや] のむ。毒 [どく] のまない。これながいきの薬 [くすり] ある。のむよろしい。」支那人 [しなじん] はもうひとりでかぶつと呑 [の] んでしまひました。

山男 [やまをところ] はほんとうに呑 [の] んでいゝだらうかとあたりを見 [み] ますと、じぶんはいつか町 [まち] の中 [なか] でなく、空 [そら] のやうに碧 [あを] いひろい野原 [のはら] のまんなかに、眼 [め] のふちの赤 [あか] い支那人 [しなじん] とたつた二人 [ふたり]、荷物 [にもつ] を間 [あひだ] に置 [お] いて向 [むか] ひあつて立

「た」つてゐるのでした。二人「ふたり」のかげがまつ黒「くろ」に草「くさ」に落「お」ちました。

「さあ、のむよろしい。ながいきのくすりある。のむよろしい。」支那人「しなじん」は尖「とが」つた指「ゆび」をつき出「だ」して、しきりにすすめるのでした。山男「やまをとこ」はあんまり困「こま」つてしまつて、もう呑「の」んで遁「に」げてしまはうとおもつて、いきなりふいつとその薬「くすり」をのみました。するとふしぎなことには、山男「やまをとこ」はだんだんからだのでこぼこがなくなつて、ちぢまつて平「たひ」らになつてちいさくなつて、よくしらべてみると、どうもいつかちいさな箱「はこ」のやうなものに変「かは」つて草「くさ」の上「うへ」に落「お」ちてゐるらしいのでした。

（やられた、畜生「ちくしやう」、たうたうやられた、さつきからあんまり爪「つめ」が尖「とが」つてあやしいとおもつてゐた。畜生「ちくしやう」、すつかりうまくだまされた。）山男「やまをとこ」は口惜「くや」しがつてばたばたしやうとしましたが、もうたゞ一箱「ひとはこ」の小「ちい」さな六神丸「ろくしんぐわん」ですからどうにもしかたありませんでした。

ところが支那人「しなじん」のほうは大「おほ」よろこびです。ひよいひよいと両脚「り

やうあし] をかはるがはるあげてとびあがり、ばんばんと手 [て] で足 [あし] のうらをたたきました。その昔 [おと] はつづみのやうに、野原 [のはら] の遠 [とほ] くのはうまでひびきました。

それから支那人 [しなじん] の大 [おほ] きな手 [て] が、いきなり山男 [やまをところ] の眼 [め] の前 [まへ] にでてきたとおもふと、山男 [やまをところ] はふらふらと高 [たか] いところにのぼり、まもなく荷物 [にもつ] のあの紙箱 [かみばこ] の間 [あひだ] におろされました。

おやおやとおもつてゐるうちに上 [うへ] からばたつと行李 [かうり] の蓋 [ふた] が落 [お] ちてきました。それでも日光 [につくわう] は行李 [かうり] の目 [め] からうつくしくすきとほつて見 [み] えました。

(たうたう牢 [らう] におれははいつた。それでもやつぱり、お日 [ひ] さまは外 [そと] で照 [て] つてゐる。) 山男 [やまをところ] はひとりでこんなことを呟 [つぶ] やいて無理 [むり] になしいのをごまかさうとしました。するとこんどは、急 [きふ] にもつとくらくくなりました。

(ははあ、風呂敷 [ふろしき] をかけたな。いよいよ情 [なさ] けないことになつた。こ



れから暗 [くら] い旅 [たび] になる。) 山男 [やまをところ] はなるべく落 [お] ち着 [つ] いてかう言 [い] ひました。

すると愕 [おど] ろいたことは山男 [やまをところ] のすぐ横 [よこ] でものを言ふやつがあるのです。

「おまへさんはどこから来 [き] なすつたね。」

山男 [やまをところ] ははじめぎくつとしましたが、すぐ、

(ははあ、六神丸 [ろくしんぐわ] といふものは、みんなおれのやうなぐあひに人間 [にんげん] が薬 [くすり] で改良 [かいりやう] されたもんだな。よしよし、) と考 [かん] が] へて、

「おれは魚屋 [さかなや] の前 [まへ] から来 [き] た。」と腹 [はら] に力 [ちから] を入 [い] れて答 [こた] へました。すると外 [そと] から支那人 [しなじん] が嘯 [か] みつくやうにどなりました。

「声 [こゑ] あまり高 [たか] い。しづかにするよろしい。」

山男 [やまをところ] はさつきから、支那人 [しなじん] がむやみにしやくにさわつてゐましたので、このときはもう一 [いつ] ペんにかつとしてしまひました。

「何 [なん] だと。何 [なに] をぬかしやがるんだ。どろぼうめ。きさまが町 [まち] へはいつたら、おれはすぐ、この支那人 [しなじん] はあやしいやつだとどなつてやる。さあどうだ。」

支那人 [しなじん] は、外 [そと] でしんとしてしまひました。じつにしばらくの間 [あひだ]、しいんとしてゐました。山男 [やまをとこ] はこれは支那人 [しなじん] が、両手 [りやうて] を胸 [むね] で重 [かさ] ねて泣 [な] いてゐるのかなともおもひました。さうしてみると、いままで峠 [たうげ] や林 [はやし] のなかで、荷物 [にもつ] をおろしてなにかひどく考 [ほんが] へ込 [こ] んでゐたやうな支那人 [しなじん] は、みんなこんなことを誰 [たれ] かに云 [い] はれたのだなと考 [かんが] へました。山男 [やまをとこ] はもうすつかりかあいさうになつて、いまのほうそだよと云 [い] はうとしてゐましたら、外 [そと] の支那人 [しなじん] があわれなしわがれた声 [こゑ] で言 [い] ひました。

「それ、あまり同情 [どうじやう] ない。わたし商売 [しやうばい] たたない。わたしおまんまたべない。わたし往生 [わうじやう] する、それ、あまり同情 [どうじやう] ない。」山男 [やまをとこ] はもう支那人 [しなじん] が、あんまり気 [き] の毒 [どく] になつ

てしまつて、おれのからだなどは、支那人 [しなじん] が六十銭 [せん] もうけて宿屋 [やどや] に行 [い] つて、鱈 [いわし] の頭 [あたま] や菜 [な] つ葉汁 [ばじる] を食べるかはりにくれてやらうとおもひながら答 [こた] へました。

「支那人 [しなじん] さん、もういゝよ。そんなに泣 [な] かなくてもいゝよ。おれは町 [まち] にはいつたら、あまり声 [こゑ] を出 [だ] さないやうにしやう。安心 [あんしん] しな。」すると外 [そと] の支那人 [しなじん] は、やつと胸 [むね] をなでおろしたらしく、ほおといふ息 [いき] の声 [こゑ] も、ばんばんと足 [あし] を叩 [たゝ] いてゐる音 [おと] も聞 [きこ] えました。それから支那人 [しなじん] は、荷物 [にもつ] をしよつたらしく、薬 [くすり] の紙箱 [かみばこ] は、互 [たがひ] にかたがたぶつづかりました。

「おい、誰 [たれ] だい。さつきおれにものを云ひかけたのは。」

山男 [やまをとこ] が斯 [か] う云 [い] ひましたら、すぐとなりから返事 [へんじ] がきました。

「わしだよ。そこでさつきの話 [はなし] のつゞきだがね、おまへは魚 [さかな] 屋の前 [まへ] からきたとすると、いま鱸 [すゞき] が一匹 [いつぴき] いくらするか、またほ

したふかのひれが、十両 [ジツテール] に何片 [なんぎん] くるか知 [し] つてるだらうな。」

「さあ、そんなものは、あの魚屋 [さかなや] には居 [ゐ] なかつたやうだぜ。もつとも章魚 [たこ] はあつたがなあ。あの章魚 [たこ] の脚 [あし] つきはよかつたなあ。」

「へい。そんないい章魚 [たこ] かい。わしも章魚 [たこ] は大 [だい] すきでな。」

「うん、誰 [たれ] だつて章魚 [たこ] のきれいな人 [ひと] はない。あれを嫌 [きら] ひなくらゐなら、どうせろくなやつぢやないぜ。」

「まつたくさうだ。章魚 [たこ] ぐらゐりつばなものは、まあ世界中 [せかいぢう] にないな。」

「さうさ。お前 [まへ] はいつたいどこからきた。」

「おれかい。上海 [しやんはい] だよ。」

「おまへはするとやつぱり支那人 [しなじん] だらう。支那人 [しなじん] といふものは薬 [くすり] にされたり、薬 [くすり] にしてそれを売 [う] つてあるいたり気 [き] の毒 [どく] なもんだな。」

「さうでない。ここらにあるいてるものは、みんな陳 [ちん] のやうないやしいやつばかりだが、ほんたうの支那人 [しなじん] なら、いくらでもえらいりつばな人 [ひと] がある。われわれはみな孔子聖人 [こうしせいじん] の末 [すゑ] なのだ。」

「なんだかわからないが、おもてにゐるやつは陳 [ちん] といふのか。」

「さうだ。ああ暑 [あつ] い、蓋 [ふた] をとるといゝなあ。」

「うん。よし。おい、陳 [ちん] さん。どうもむし暑 [あつ] くていかんね。すこし風 [かぜ] を入 [い] れてもらひたいな。」

「もすこし待 [ま] つよろしい。」陳 [ちん] が外 [そと] で言 [い] ひました。

「早 [はや] く風 [かぜ] を入 [い] れないと、おれたちはみんな蒸 [む] れてしまふ。お前 [まへ] の損 [そん] になるよ。」

すると陳 [ちん] が外 [そと] でおろおろ声 [ごゑ] を出 [だ] しました。

「それ、もとも困 [こま] る、がまんしてくれるよろしい。」

「がまんも何 [なに] もないよ、おれたちがすきでむれるんぢやないんだ。ひとりでにむれてしまふさ。早 [はや] く蓋 [ふた] をあけろ。」

「も二十分 [じつぷん] まつよろしい。」

「えい、仕方[しかた]ない。そんならも少[すこ]し急[いそ]いであるきな。仕方[しかた]ないな。ここに居[ゐ]るのはおまへだけかい。」

「いゝや、まだたくさんゐる。みんな泣[な]いてばかりゐる。」

「そいつはかあいさうだ。陳[ちん]はわるいやつだ。なんとかおれたちは、もいちどもとの形[かたち]にならないだらうか。」

「それはできる。おまへはまだ、骨[ほね]まで六神丸[ろくしんぐわん]になつてゐないから、丸薬[ぐわんやく]さへのめばもとへ戻[もど]る。おまへのすぐ横[よこ]に、その黒[くろ]い丸薬[ぐわんやく]の瓶[びん]がある。」

「さうか。そいつはいゝ、それではすぐ呑[の]まう。しかし、おまへさんたちはのんでもだめか。」

「だめだ。けれどもおまへが呑[の]んでもとの通[とほ]りになつてから、おれたちをみんな水[みづ]に漬[つ]けて、よくもんでもらひたい。それから丸薬[ぐわんやく]をのめばきつとみんなもとへ戻[もど]る。」

「さうか。よし、引[ひ]き受[う]けた。おれはきつとおまへたちをみんなもとのやうにしてやるからな。丸薬[ぐわんやく]といふのはこれだな。そしてこつちの瓶[びん]

は人間 [にんげん] が六神丸 [ろくしんぐわん] になるほうか。陳 [ちん] もさつきおれといつしよにこの水薬 [みづぐすり] をのんだがね、どうして六神丸 [ろくしんぐわん] にならなかつたらう。」

「それはいつしよに丸薬 [ぐわんやく] を呑 [の] んだからだ。」

「ああ、さうか。もし陳 [ちん] がこの丸薬 [ぐわんやく] だけ呑 [の] んだらどうなるだらう。変 [かは] らない人間 [にんげん] がまたもとの人間 [にんげん] に変 [かは] るとどうも変 [へん] だな。」

そのときおもてで陳 [ちん] が、

「支那 [しな] たものよろしいか。あなた、支那 [しな] たもの買 [か] ふよろしい。」と云ふ声 [こゑ] がしました。

「ははあ、はじめたね。」山男 [やまをとこ] はそつとかう云 [い] つておもしろがつてゐましたら、

俄 [には] かに蓋 [ふた] があいたので、もうまぶしくてたまりませんでした。それでもむりやりそつちを見 [み] ますと、ひとりのおかつぱの子供 [こども] が、ぽかんと陳 [ちん] の前 [まへ] に立 [た] つてゐました。

陳 [ちん] はもう丸薬 [ぐわんやく] を一 [ひと] つぶつまんで、口 [くち] のそばへ持 [も] っけて行きながら、水薬 [みづぐすり] とコップを出 [だ] して、

「さあ、呑 [の] むよろしい。これながいきの薬 [くすり] ある。さあ呑 [の] むよろしい。」とやつてゐます。

「はじめた、はじめた。いよいよはじめた。」行李 [かうり] のなかでたれかが言 [い] ひました

「わたしビール呑 [の] む、お茶 [ちや] のむ、毒 [どく] のまない。さあ、呑 [の] むよろしい。わたしのむ。」

そのとき山男 [やまをとこ] は、丸薬 [ぐわんやく] を一つぶそつとのみました。すると、めりめりめりめりつ。

山男 [やまをとこ] はすつかりもとのやうな、赤髪 [あかがみ] の立派 [りつぱ] なからだになりました。陳 [ちん] はちょうど丸薬 [ぐわんやく] を水薬 [みづぐすり] といつしよにのむところでしたが、あまりびつくりして、水薬 [みづぐすり] はこぼして丸薬 [ぐわんやく] だけのみました。さあ、たいへん、みるみる陳 [ちん] のあたまがめらあつと延 [の] びて、いままでの倍 [ばい] になり、せいがめきめき高 [たか] くなりました



た。そして「わあ。」と云ひなが

ら山男〔やまをとこ〕につかみかかりました。山男〔やまをとこ〕はまんまるになつて一生〔しやう〕けん命〔めい〕遁〔に〕げました。ところがいくら走〔はし〕らうとしても、足〔あし〕がから走〔はし〕りといふことをしてゐるらしいのです。たうたうせなかをつかまれてしまひました。

「助〔たす〕けてくれ、わあ、」と山男〔やまをとこ〕が叫〔さけ〕びました。そして眼〔め〕をひらきました。みんな夢〔ゆめ〕だつたのです。

雲〔くも〕はひかつてそらをかけ、かれ草〔くさ〕はかんばしくあたたかです。

山男〔やまをとこ〕はしばらくぼんやりして、投〔な〕げ出〔だ〕してある山鳥〔やまどり〕のきらきらする羽〔はね〕をみたり、六神丸〔ろくしんぐわん〕の紙箱〔かみばこ〕を水〔みづ〕につけてもむことなどを考〔かんが〕へてゐましたがいきなり大〔おほ〕きなあくびをひとつして言〔い〕ひました。

「えゝ、畜生〔ちくしやう〕、夢〔ゆめ〕のなかのこつた。陳〔ちん〕も六神丸〔ろくしんぐわん〕もどうにでもなれ。」

それからあくびをもひとつしました。

■このファイルについて

標題：山男の四月

著者：宮澤賢治

本文：「注文の多い料理店」

発行：大正十三年十二月一日

販売元：杜陵出版部／東京光原社

新選 名著復刻全集 近代文学館 昭和51年4月1日 発行

(第14刷)

表記：原文の表記を尊重しつつ、以下のように扱います。

○誤字・脱字等は訂正せず、底本通りとしました。

○本文のかなづかいは、底本通りとしました。

○旧字体は、現行の新字体に替えました。ただし、新字体に替えなかった漢字もあります。

新字体がない場合は、旧字体をそのまま用いました。

○繰り返し記号／＼は用いず、同語反復としました。

入力：今井安貴夫

ファイル作成：里実工房

公開：里実文庫 2005年11月6日